A-6-2

幼児期の子どもを育てる母親のプロダクティビティ尺度の開発と信頼性・妥当性の検証

○石村　珠美[1)]　片平　伸子[2)]　臺　有桂[3)]

1）国際医療福祉大学小田原保健医療学部看護学科

2）国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科

3）神奈川県立保健福祉大学保健福祉学学部看護学科

■研究背景

現在わが国では、周産期医療体制の整備と医療技術の進歩により、在宅で医療的ケアを受けながら生活している子ども（以降、医療的ケア児と記載）が増加している。医療的ケア児の育児を担うのは主に母親であること、特に幼児期の医療的ケア児を育てる母親の負担が明らかとなっているにもかかわらず、その育児負担感や社会参加への欲求が充足されていないことは大きな課題である。さらに、医療的ケア児だけではなく健康な子どもの育児においても、育児負担感に対する支援、自己効力感やソーシャル・サポートの認識への支援が必要な状況があることが明らかとなっている[1)]。

先行研究から、自分の強みを認識し、生活の中でその強みを発揮し活用している感覚が強いほど自尊感情が高いことや、前向き感情や幸福感の増加といった効果が得られること、ウェルビーイングへの効果が得られることなどが報告されており[2)]、強みを把握した支援の必要性が見出された。

母親の育児負担感や精神的不安に対し、子育てを通じて得られた知識や経験を母親の強みと捉え、その強みを発揮することで母親が子育てを行いながら自己実現を可能にするよう支援することは重要である。

■研究目的

本研究では、「経験や知識が強みとなり社会に貢献し得る生産性」を示すプロダクティビティという概念[3)]をもとに、幼児期の子どもを育てる母親のプロダクティビティを測る尺度を開発し、信頼性と妥当性の検証を行うことを目的とした。

■研究方法

●研究デザイン

尺度開発

●研究プロセス

【第Ⅰ段階】幼児期の子どもを育てる母親のプロダクティビティ予備調査

1.質問項目原案作成　（調査期間：2022年5月）

内容妥当性を検討し、幼児期の子どもを育てている母親10名に対するプレテストを経て尺度質問項目原案を作成した。

2.予備調査　（調査期間：2022年5月～7月）

尺度質問項目原案を用いて、435名を対象に予備調査を行った。

項目分析、探索的因子分析等により信頼性・妥当性を検証し尺度原案を作成した。

＜対象：リクルート＞

インターネット調査会社に登録している方の中から、条件を幼児期の子どもを育てている母親に絞り込み、スクリーニングを経て回答した435名。

【第Ⅱ段階】幼児期の子どもを育てる母親のプロダクティビティ本調査

3.本調査（調査期間：2022年8月～11月）

＜対象：リクルート＞

①インターネット調査会社に登録している幼児期の子どもを育てる母親411名。

②関連施設、訪問看護ステーション等の協力を得て、配布したポスターのQRコードを読み取り回答した、幼児期の医療的ケア児を育てる母親97名。

＜分析＞

・**分析対象：**予備調査で作成した尺度原案を用い、新たな調査で得られたデータ。

・**分析方法：**記述統計、項目分析、探索的因子分析（最尤法-プロマックス回転）、確認的因子分析、基準関連妥当性の検証、クロンバックα信頼係数の算出。

・基準関連妥当性の外的基準は「個人志向性・社会志向性尺度」[4)]を用いた。

・統計ソフトはIBM SPSS Version28を用い、有意水準は $p < .05$とした。確認的因子分析は、統計ソフトIBM Amos Version28を用いた。

幼児期の子どもを育てる母親のプロダクティビティ尺度作成

■倫理的配慮

本研究は国際医療福祉大学倫理審査会の承認を得て実施した（21-Ig-260、 22-Ig-66、22-Ig-66-2、23-Ig-87、23-Ig-88）。

■研究結果

【第Ⅰ段階】幼児期の子どもを育てる母親のプロダクティビティ予備調査

＜対象＞

インターネット調査会社を活用し、回答した幼児期の子どもを育てている母親435名を対象とした（有効回答率87.00%）。

＜分析結果＞

精選した70項目から成る質問項目原案は、予備調査の結果5因子構造42項目の尺度が生成され、信頼性・妥当性が確認された（全体寄与率=51.25、Cronbachのα係数= .96）。

【第Ⅱ段階】幼児期の子どもを育てる母親のプロダクティビティ本調査

＜対象＞

①と②を合わせた幼児期の子どもを育てる母親 508名を対象とした。

①インターネット調査

インターネット調査会社を活用し、回答した幼児期の子どもを育てている母親411名（有効回答率82.20%）。

②関連施設に依頼した医療的ケア児の母親

協力が得られた施設に送付したポスターに載せたQRコードを通して回答した、幼児期の医療的ケア児を育てる母親97名（有効回答率94.17%）。

＜分析結果＞

項目分析と探索的因子分析により**4因子28項目**の尺度が生成された（全体寄与率 = 54.57）。また、全体Cronbachのα係数が.95、因子別では .85～ .92の範囲であった（表1）。

さらに、確認的因子分析により仮説モデルの適合度が確認された（GFI = .86、AGFI = .83、CFI = .91、RMSEA = .07）（図1）。

外的基準である「個人志向性・社会志向性尺度」との相関係数は正の有意な相関が認められた（r = .38～.65）（表2）。

表1.幼児期の子どもを育てる母親のプロダクティビティ尺度

第1因子【育児に活かす対応力】 Cronbach α係数 = .90	
A-4	私は，子どもに起きていることの良い面と悪い面を考え行動できる
A-3	私は，育児中に起きたことについて落ち着いて考えられる
A-7	私は，育児を行いながら，家族の状況に合わせて生活をすることができる
A-6	私は，子育て全般について，多くの視点から考えられる
A-10	私は，子どもの発達や発育に合わせて自分なりの子育てをすることができる
A-2	私は，子どもに何かあったとき，対処方法をいくつか考えることができる
D-3	私は，人に指示されるよりは自分で判断して行動する方だ
D-2	私は，自分の意見や行動には責任をもっている
D-1	私は，自分の考えに自信をもっている
第2因子【育児がもたらす自己肯定感】 Cronbach α係数 = .92	
C-8	育児経験によって自分は価値があるという自信を持てるようになる
C-20	育児は，育児をしている自分を元気にしてくれる活動だと思う
C-13	育児とは，自分の健康にとって良い影響をもたらすものである
B-1	育児を経験したことで，喜怒哀楽の感情を状況に合わせてコントロールできるようになった
C-16	私は，家族以外助けてくれる人がない中でも育児をする覚悟がある
B-13	自分自身に対して自信が持てるようになった
C-15	育児は，自分の得意とすることを発揮するきっかけになると思う
C-12	育児は，自分が夢中になるものを見つけたいと思えるきっかけになる
C-17	育児は，自分が日々の生活で行なっていることには意味があると感じるきっかけになると思う
第3因子【育児経験がもたらす前向き思考】 Cronbach α係数 = .85	
C-4	育児経験は，自分や他者をあるがままに受け止めることができるきっかけをつくるものである
C-5	育児経験は，自分で自分を管理して仕事や家事・育児を進められるようになるきっかけをつくるものである
C-6	育児経験は，社会のサービスを活用しようと考えるきかっけになるものである
C-11	育児経験を通して得られる家族以外の他者の反応は，自分の心の支えになる
D-6	私は，何か人のためになれることをしたいと思う
第4因子【育児がもたらす自己成長】 Cronbach α係数 = .86	
B-6	私は自分の育児経験を誰かに伝えたいと思う
B-8	私には子育てを通した自分にしかない知識があると思う
B-7	私には子育てを通した自分にしかない経験があると思う
B-15	私は，子育てに悩んでいるお母さんの手助けをしたいと思う
B-11	自分の育児経験は子育て以外にも活かせると思う

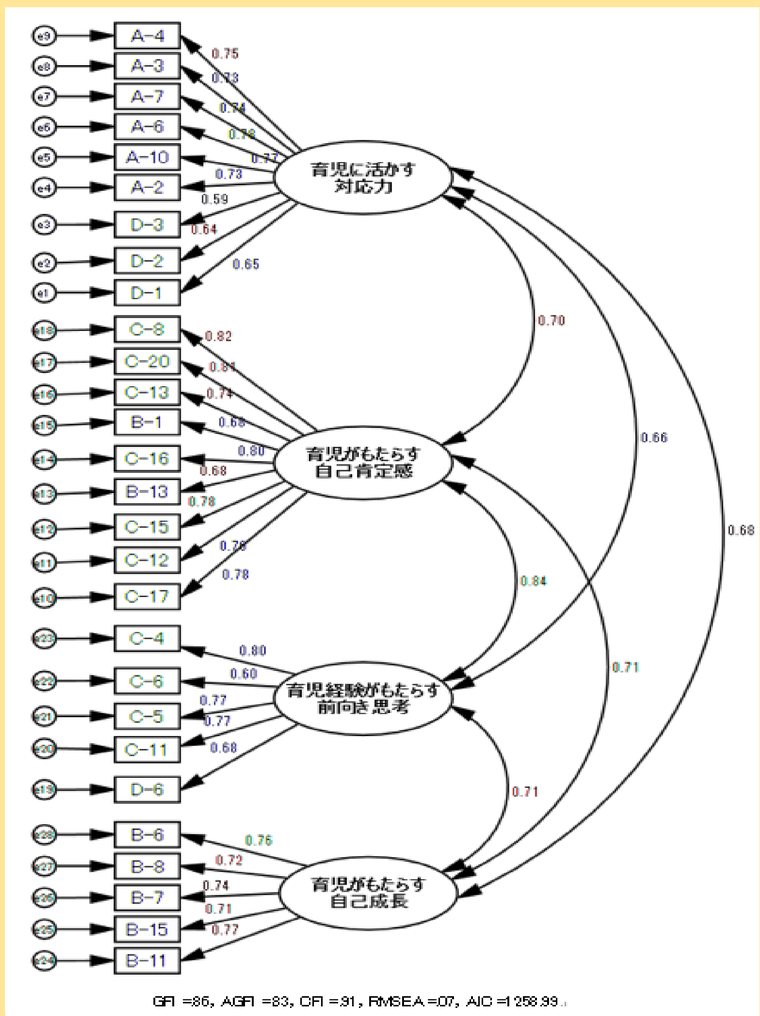

図1.確認的因子分析結果　尺度全体

表2.尺度と「個人志向性・社会志向性尺度」との相関

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	因子全体
社会志向性	.52**	.48**	.51**	.55**	.60**
個人志向性	.59**	.44**	.41**	.38**	.54**
志向性全体	.63**	.52**	.53**	.51**	.65**

ピアソンの相関係数　有意確率（両側）　$^{**}p < .01$　$^{*}p < .05$

■考察・結論

本研究の結果、**4因子28項目**から成る**「幼児期の子どもを育てる母親のプロダクティビティ尺度」**が構築された。

本尺度は、幼児期の子どもを育てる母親を対象として、育児経験が母親に及ぼす前向きな影響や自己の成長、柔軟な思考・行動などの強み、といった母親のプロダクティビティを測る尺度として一定の信頼性・妥当性が確認できた。

看護職者はこの尺度を活用して、母親が子育てを通じて得た知識や経験を「強み」と捉える前向きな発想で自己実現が可能になるよう支援することが求められる。

今後、本尺度の活用により、特に育児困難感を抱えている幼児期の医療的ケア児を育てる母親の特性を見出し、具体的看護介入を検討する。

■文献

1）鈴木美佐,古株ひろみ.4歳から6歳の幼児をもつ母親の育児負担感と自己効力感，ソーシャル・サポートの関連.聖泉看護学研究. 2015;4:11-20

2）阿部望,石川信一.ポジティブ心理学における強み研究についての課題と展望.心理臨床科学.2016; 6(1):17-28

3）石村珠美,臺有桂,山下留理子.成人および高齢者のヘルスプロモーション活動の支援に活かす「プロダクティビティ」概念分析.日本健康教育学会誌.2021;29(3): 245-253

4）伊藤美奈子.個人志向性・社会志向性尺度の作成および信頼性・妥当性の検討.心理学研究.1993;64(2):115-122

■利益相反

本演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業・組織および団体等はありません

本研究は、公益財団法人勇美記念財団の2021年度助成を受けて行った